東京交響楽団
楽団員が語る
名曲のツボ
Vol.54

Oboe Concerto
Richard Strauss

R.シュトラウス作曲 オーボエ協奏曲

ソロの長いフレーズは、男女の会話
オーケストラとの会話にもこだわりたい

©N. Ikegami

首席オーボエ奏者
荒 絵理子
Eriko Ara

オーボエは、弦楽器の厚い響きの中で奏でると一段と輝かしく聴こえる楽器ですが、そんな場面がとても多い曲がリヒャルト・シュトラウスのオーボエ協奏曲です。そしてなにより、オーボエ奏者の憧れの曲、吹きたい曲ナンバー1の作品です。とはいえ、テクニック的に難しく、さらに体力も使う曲です。なにしろ全3楽章が切れ目なく演奏され、特に第1楽章が始まったら第2楽章途中まで吹きっぱなし。体力つけるために筋トレしたほうがいいんじゃないかと思うほどで(笑)、長いフレーズをいかに持続して吹くかが、この曲の最初の難関です。その後に登場する、下行の音階と軽やかな跳躍は、シュトラウスの作品の中で私が最も好きなパッセージ。おどけた、おしゃれなフレーズが突然現れるのがシュトラウスらしく、お茶目だと思います。

私の師匠・宮本文昭から教わったのは、「シュトラウスはとてもおしゃべりな人だった。だから、どの曲も会話しているように演奏しなさい」。第1楽章の長いフレーズも、男女の会話だと。私もそんな場面を描ければと思っています。

この曲について、数多くの奏者の録音や生演奏を聴きましたが、師匠ほど「会話」のように演奏し、色気をうねるように表現した人はいません。このように吹くのがシュトラウスなんだと、彼のレッスンと実演を通じて分かりました。

最も心打たれるのが第2楽章です。自然と涙が出てくるような旋律を、私も心が染みるように演奏できたらと思います。オーボエは「音の跳躍」で物語ることができる楽器だと思っていますが、第2楽章最初の旋律の中の跳躍も大好きなので、大切に表現したいです。第3楽章は、それまで抑えていたオーケストラのテンションがきっと上がるので、私もそれに負けない表現ができるかが勝負です。

全曲の中で私の一番のこだわりは、第2楽章カデンツァ前の、とても静かに吹くところ。音もリズムも難しくありませんが、こういう場面こそ腕の見せ所なので、心を込めて吹きたいです。

オーケストラの中にはオーボエはなく、イングリッシュホルンが1本あります。独奏オーボエとの掛け合いが特に第1・3楽章に出てきて、2つの楽器で旋律が入れ替わるのがユニークなので、ぜひ注目してください。

この協奏曲をオーケストラと初めて共演したのは、日本音楽コンクール優勝後の20代前半のとき。そのときは感動しながら、自分の思うまま楽しく吹いていました。しかし経験を積むにつれ、オーケストラ作品でもそうですが、自分のソロを上手に吹くだけでなく、ほかの様々な楽器といかに掛け合い、融合するか、そこを大切にするようになりました。オーボエ協奏曲はシュトラウスの晩年の作品なので、各楽器がとても入り組んでいます。オーケストラ全体との協同作業で成り立つ協奏曲ですから、東響と共に、よりシュトラウスらしい音楽ができたらと強く思っています。

東響とは、入団直前に一度この曲で共演していますが、入団後は初めて。さらにノット監督の指揮で協奏曲のソロを吹くのは初めてです。普段一緒に音楽づくりをしている仲間たちとの「会話」が、本当に楽しみです。

リヒャルト・シュトラウス(1864〜1949)のオーボエ協奏曲は、第二次世界大戦終戦後の1945年作曲。同年完成の「メタモルフォーゼン」の後に書かれた最晩年の作品です。

モーツァルト・マチネ 第38回

2019年11月24日(日) 11:00開演
(休憩なし/終演予定12:10頃)

指揮:ジョナサン・ノット
オーボエ:荒 絵理子(東京交響楽団 首席オーボエ奏者)
管弦楽:東京交響楽団

■R. シュトラウス:オーボエ協奏曲 ニ長調 AV. 144
■モーツァルト:交響曲 第41番 ハ長調 K.551「ジュピター」

一般料金(全席指定) ¥3,500
◎友の会料金 全席指定 ¥3,150
◎U25(小学生〜25歳) ¥1,000